

ローベルト・ムージルの 『特性のない男』 発刊に寄せて

加 藤 二 郎

はじめにお断りしておきますが、この雑文は一七世紀の文学とは縁がなく、現代の作家ローベルト・ムージル（1880—1942）とその主著『特性のない男』について、その一端とその周辺のことを紹介するものです。もっとも芸術にせよ文学にせよ、過去との関わりなしにはよくれ悪しかれ存在しえないことも考えに入れれば、むしろ『特性のない男』の場合でも、たとえば一七世紀との関わりを敢えて求めれば（それも人間の内面性との関連にかぎって少しばかり例をあげれば）、Jeanne Marie Bouviets や Henne Hayen といった神秘主義者の神との合一（Unio mystica）体験の告白からの引用があり、さらにさかのぼってマイスター・エックハルト、さらにさかのぼっては老子からの引用、古代神話のイシスとオシリス、ピグマリオン、あるいは人間が昔の自分の片割れをたがいに求め合うようになったという、プラトンの『饗宴』における愛の神話、また楽園のアダムとエヴァ、楽園追放と原罪に関することなど、人間の愛に関するさ

まざまな伝承や告白や思想に、ムージルが自分の生の刹那刹那の抛り所を求め、またそれらを自家薬籠中のものにして彼の思想の明晰な言語化のために使用し、それらに新風を送り込んでいるといっておかなければなりません。

足掛け八年かかったと思うが、ようやくR・ムージルの長編小説『特性のない男』（原名、Der Mann ohne Eigenschaften）が発刊できる見込みとなった。

この難解でもあり長々しくもあり未完でもある小説を、改訳とは申せ、またぞろ愚かにも訳そうとした私も私であるが、その売れそうにもない訳本を出版しようとした書房も書房である。この蛮勇をもつ書房は松籟社（京都）といい、これまでにドイツ文学関係では「シュティフター作品集 全四巻」、「ケラー作品集 全五巻」、「ハイネ散文作品集 全四巻」のうち三巻を出している。そして松籟社になり代わって「ムージル作品集 全九巻」

の広告をここですれば、今年は偶然にもムージル没後五〇年に当たるのであるが、この二月中旬を皮切りに、まず拙訳の『特性のない男』の六巻本が三か月おきに刊行され、そのあとにはほかの方々が訳す第七、八、九巻がやはり三か月おきに続く運びになっている。第七巻には処女作の『テルレス』、二つの短編集『愛の完成・静かなヴェロニカの誘惑』と『三人の女』、第八巻には、ムージルが生前にまともに出した短編集『生前の遺書』、二つの戯曲『フィンツェンツ』と『夢想家たち』、第九巻には叙情詩、エッセイ、評論、批評、日記、書簡その他がおさめられている。

1 Musilの日本語表記について

さて、「ギョエテとおれのことかとゲーテいい」とGoetheの日本語表記に関する川柳めいたものがあつたが、これは逆に「ゲーテとおれのことかとギョエテいい」と言い換えることもできると思われる。日本人がギョエと発音するとき、少なくとも口はOウムラウトを発音する丸いくちびるになっており、ただゲーと伸ばして発音したときよりも、はるかにドイツ語のGoetheの発音に近いものになっていると思われるからである。そして同じことがMusilの場合でも、「ムージルとおれのことかとムシルいい」といえるような気がする。ドイツ人

なら、Musilの最初の母音Uは長音にしてMUをムーと読み、次のSIは濁らせてジと短音で読み、したがって全体をムージルと読むのが彼らの習わしだろう。しかしムージルは、多民族国家で今は滅亡して存在していないオーストリアハンガリー帝王国の市民であり、チェコ系の祖先をもつといわれる人なので、ムシルと読んだほうがいいのではないかと思われる。ここで因に『特性のない男』について言及すれば、この小説は、この大帝国（ムージルはこの長たらしい国名を略称してカカニア国という）が崩壊することになる第一次世界大戦の前夜に当たる一九一三年の夏から、セルビア人の解放を叫ぶ二発の銃弾によりオーストリア皇太子夫妻がサラエボで暗殺されて、戦争が勃発することになるその翌年の夏までの九一年間を時代背景とし、舞台はおもに首都にして帝都であつたウィーンである。作者のムージルはおもにこの小説の第一巻で、すでに崩壊を内包していたカカニア国をなんとか一つにまとめる目的で「平行運動」という大愛国運動を、愛国者の貴族ラインスドルフ伯爵を中心にして計画させ、伯爵は有力な外務省の局長トゥッチの妻ディオティーマが主催するサロンを利用して、この運動を推進し盛り上げようとする。ところでこの運動の最終目的は、カカニア国の皇帝兼国王であるヨーゼフ一世は一九一八年に即位七〇周年を迎えることになるので、

国をあげてこれを祝う祝典を催すための準備なのである。しかし一九一八年といえはこの大帝国が破滅して、ハンガリー、チエコスロバキア、ユーゴスラビア、ルーマニアその他に分裂して、中心であったオーストリアが北海道程度の小さな国土になる敗戦の年に当たり、それを当然知っている読者には、この運動は失敗するように作者によって皮肉に仕組まれた喜劇であることがはじめから分かっているはずのものである。ムージルはこの運動を「第一巻」のいわば推進装置にしながら、今はなき「古き良き時代」の多民族（ドイツ系のオーストリア人の他に、ハンガリー人、ポーランド人、チェコ人、イタリア人、フリアウル人、ラディアン人、スロヴェニア人、クロアット人、セルビア人、スロヴァキア人、ルテニア人、ワラキア人など）を擁した多彩な国柄を、そしてそれゆえにその多民族間のバランスをどうにかこうにか取っていかなければならなかった政治的な困難さを、さまざまな面から彼一流のウィットに富み厳密でしかも澄んだ文章で綴り、いわば今はなき祖国への挽歌を奏しているともいえるのである。昨年急激に崩壊した多民族国家のソ連邦、目下セルビア人とクロアット人との内紛で苦悩しているユーゴスラビア共和国の有様を新聞やテレビで見聞きするにつけ、そういう点ではカニアは世界で最も進歩した国であったという、『特性

のない男』のなかの言葉を思い出す。

ここでMusilの日本語表記の話に戻ることにする。かつて東京でオリンピックが催されたとき、それに参加したチエコの選手が監督にMusilを名乗る人がいたが、新聞にはムシルと表記されていた。また私の数少ない外国での経験を披露すれば、ドイツのザールブリュッケン大学のMusil研究所の所長ロート教授、ウィーン大学の日本学のパンツァー教授、Musilの生誕地クラゲンフルトで私が泊まった宿の若いボーイは、私が確かめると、いずれの人もMusilはムシルだと答え、ローマからウィーンへ向かう夜行列車で偶然同席することになったウィーン大学で心理学をおさめているという金髪の娘さんに、あなたはオーストリアの作家のムシルを知っているかと尋ねたら、額にしわを寄せてちょっと考え込み、「ああ、ローベルト・ムージル！ それなら彼の『三人の女』を読んだことがある」と答えた。戦後に出たDudenの発音辞典では、発音記号でまずムシルとあり、そのあとにムージルと併記されていた。だがその後の改定版のDudenでは、ドイツ人流の読み方のムージルだけになってしまっている。もしこうした発音辞典がオーストリアで独自に出されるとすればどうなるか、興味深いところである。私がいいたいのは、たとえばMataは国によって発音が少しずつちがうように、Musilもドイツとオー

ストリアではちがうのではないかということである。と
いって、くどくそれを主張したいとも思わない。戦後の
日本の出版物では、Musilの読み方は自由を謳歌して、
ムシル、ムシル、ムジール、ムージル、ムージール、そ
の他いろいろに表記されていた。この二、三年のあいだ
に岩波からの文庫の形で Musil の短編集『愛の完成・
静かなヴェロニカの誘惑』（1911）と『三人の女』
（1924）が次々に出されたが、著者名はおそらく改訂版
の Duden にならってであろう、いずれもムージルと表
記されている。松籟社は八年前にムージルに統一したい
といい、私もこの読み方を統一したほうがいいと思って
いたので、それをそのまま鵜呑みにしたのだが、長年ム
シルで通してきたために、ムージルという読み方にはい
まだに馴染めないでいる。それゆえここではご免を被っ
てムシルで通そうと思う。

2 『特性のない男』の成立過程について

ローベルト・ムシルの名がいわれる場合にまず挙げら
れるのは、彼が処女作『テルレス』（1906）を世に出し
てセンセーションを巻き起した頃、すでにその一部が彼
の念頭にあり、そしてその後四〇年の歳月をへてもなお
完成をみなかった『特性のない男』を描いて他にあるま
い。まさしく畢生の大作である。その第一巻がベルリン

のローベルト書房から出版されたのは一九三〇年、ムシ
ル五〇歳のときであった。第一巻の構成は第一部「一種
の序文」、第二部「千遍一律の世」の二部から成り立っ
ている。第一部は短くて七〇ページほどのもの、第一章
「注目に価することだが、何も起こらない第一章」で始
まり、第十九章「書簡による訓戒と特性を獲得する機会
二つの即位式典競争」で終わる。第二部は長くて六〇〇
ページほどのもの、第二〇章「現実との接触。特性を欠
いているにもかかわらず、ウルリヒがたくましく熱烈に
振舞うこと」で始まり、第二三章「反転」で終わる。
さて、初版のこの第一巻の巻末には第二巻の予告があり、
その構成は第三部「千年王国へ（犯罪者たち）」、第四
部「一種の終わり」であった。つまりムシルは、この小
説を短い第一部「一種の序文」で始め、同じく短い第四
部「一種の終わり」で終わらせ、そのあいだに長い部分
の第二部「千遍一律の世」と第三部「千年王国へ」を配
して、こうして左右の均整のとれた美しい二巻本の姿で、
この小説を世に送り出すつもりであったことが分かる。
しかし一九三三年に発表された第二巻は、第三部「千年
王国へ（犯罪者たち）」だけで、それも未完で三七〇ペ
ージ程度のものであった。そしてムシル生前に出された
『特性のない男』はここまでであった。

ナチスによる政権奪取、ドイツ軍のオーストリア侵入、

そしてオーストリア併合。絶えざる金欠、軽い脳溢血、創作の行き詰まりによるノイローゼ。そのなかでも『特性のない男』の仕事は続けられ、第二巻第三部の継続部分（これも未完で二〇の章からなり、一六〇ページほどのもの）が出版予定となり、一九三八年にはその校正刷りまで出たのであるが、出版社は社長以下社員の多くがストックホルムへ亡命してしまい、ムシルはいろいろと交渉したが結局出版できなくなり、一九三九年にはムシル夫妻もスイスへ亡命することになる。

亡命中の仕事はむろん『特性のない男』の第二巻第三部の継続である。W・パウジンガーによる遺稿の調査研究で明らかになったことだが、この晩年の仕事はほぼ三つのグループに分けることができ、前記の校正刷りに手を加え、これに続く章をさらに立案して制作する仕事、校正刷りの途中の章から枝分かれして、それ以後の章にある理論的な部分を会話体などにして読みやすくしかも短い章にし、そしてさらに先へ進める仕事、新たに「天才論」とも名づくべき三章を書き入れようとする試み、とであった。一九四二年の四月二〇日に突然脳卒中に見舞われて急死する（享年六二歳）まで、この仕事は続けられた。しかしこの亡命中の数年間に『特性のない男』の第二巻の継続の仕事として遺されたものは、それ以前のものにくらべればまことに少ない。他国での無名の生活、困窮

と孤独の影、体調の悪さ、急速な老いの接近、そうしたことを当時のムシルの写真、書簡、日記から読み取ることができる。しかし例えば彼が急死した日の午前中に、²清書していたといわれている第五二章「夏の日の息吹」の書き出しの部分などは、この小説中の白眉の一節ともいえ、生死を越えたといえるような、透明で絶妙な文章である。

第二次大戦中まったく無名となり、忘れられていたムシルについて戦後最初に言及したのは、イギリスの「ロンドン・タイムズ」誌であった。同紙は一九四九年、ムシルの『特性のない男』について戦後初めての賛辞を載せた。その三年後の一九五二年、つまりムシルの死後一〇年、彼の未完の大作『特性のない男』は、アドルフ・フリゼーの編集により、ドイツのローベルト出版社から発行された。同社から出版された一九三〇年の「第一巻」と三三年の「第二巻」と、遺稿を整理したものとを合本にしたものである。

3 『特性のない男』のあらすじ

第一巻の第二部「千遍一律の世」で、主人公のウルリヒ（三二歳）は「平行運動」に巻き込まれて、ラインスドルフ伯爵の秘書として働くことになる。だが最初からこの現実の非生産的な運動に乗り気ではなく、また現実

感覚ではなく「可能性感覚」とも名づくべき感覚をフルに發揮して思索する彼の問題提起にはほとんど誰も乗ってはいくれず、知性豊かでスポーツで鍛えられた偉丈夫の彼に言い寄る女性たちとの交際にも、何かに妨げられているかのように真剣には取り組めず、しかもつねに何かを求めている彼は、そのためにますます孤独感を増していく。第二部の最後の数章は掉尾を飾るにふさわしい章であるが、ここで作者のムシルは、第二部の「千遍一律の世」である現実世界のしがらみから主人公のウルリヒを引き離して、第三部の「千年王国へ」赴かせる準備をしているといっても過言ではない。

第二部の終章で、電報で父の死んだことを突然知り、第三部の第一章で、急ぎ汽車に乗って父の家に帰ったウルリヒは、そこで少年時代の一時期を除けばほとんど一緒に過ごしたことのなかった彼の「忘れていた妹」のアガート（二七歳）と会うことになる。二人はたがいに双子のようによく似ていることを知って、顔を輝かす。だがここで『特性のない男』をめぐる遺稿について少し言及しなければならぬ。それは前述の一九三三年以降に書かれた遺稿のことではなく、この小説が『特性のない男』という題名になる前の段階の遺稿についてである。それには三段階があり、題名はまず『スパイ』、次は『救世主』、そして『双子の妹』と変わってきている。

したがって『特性のない男』のすぐ前の段階では、その題名から推して妹のアガートが小説の中心だったと考えてもいいと思われる。しかしそれが『特性のない男』では、『平行運動』を軸にして展開する多民族国家カカニアの現実の描写を多く含んだ第二部により、大幅に後回しにされたのだと比喩的にいっていいだろう。しかしアガート不在のこの第二部でも、第三部で彼女を登場させるための準備がじつは着々とされていたのである。簡単にそれをいえば、いわゆる正常な精神状態とは「別の状態」（「愛の状態」）の描写や、その説明を通してである。それがもつとも顕著に現れるのは第三章「忘れられはしたが、少佐夫人とのきわめて重要な出来事」であり、ここで若き中尉時代のウルリヒ（二〇歳）が「大いなる愛」として体験したものは、主客合一の新たな世界が顕現するいわば禅の境地への参入であった。ムシルはこの万物斉同の状態を説明して、この状態では、「精神、生物界、無生物界のあいだの区別は消滅して、物のあいだにあるあらゆる種類の相違もだんだん少なくなっていく。この現象をごく冷静に言い表わせば、相違はもちろん消えもしないだろうが、相違の意味がそれらのものから脱落してしまい、愛の神秘に心を奪われた信仰者たちの手で記されたような、『人類の印であるいかなる差別にもはや隸属していない』」状態だと

いう。この引用文中の引用文は老子の言葉といわれている^④。ところでこの若いウルリヒの神秘体験は、じつは文学に目覚めはじめた頃にムージル（二一歳）が体験し、その後彼が日記のなかで「ヴァレリー体験」と称するようになった一人の若い女優に対する強烈な初恋体験がもとになっている。少し極端な発言になるけれども、若いムージルにとって神秘的とも謎めいているともいえた、このいわば言語を絶した初恋体験の解明、そしてこの原体験ともいえるものの厳密な言語化が彼生涯の仕事だったといえなくもない。彼の日記を通して、それが究明されてゆく過程がよく読み取れ、それが『特性のない男』で実現されていくのである。それゆえ『特性のない男』は愛の物語、愛探究の物語として読むことができるのである。第二部の終わりごろで、あまりに空しいと思われる平行運動の仕事から抜けようと、特性のない男としては珍しく決心したウルリヒは、この第三部で、いわば父の死亡を契機にしてこの現実世界から離れて、彼が「自身の夢のような再現であり変化である」と直感した妹のアガータとの愛の生活に、彼の流儀で参入しようとするのである（そして特にそれは、遺稿となった校正刷りの部分とそれ以後で展開し実現する）。理想的な愛の王国を構築するためには、他人ではなく、自分と生き写しの妹がその相手であることがもっとも望ましい――

「可能性感覚」のウルリヒからすればそうであるにちがいない。

アガータは一八歳のときに若い画家と恋愛結婚をしたが、新婚旅行中にその画家はわずか二、三週間のあいだにチフスに感染して死んでしまう。彼女はやがて父にいわれるままに将来有望で実直な教育家のハーガウアーと再婚したが、それに満足しているわけではなく、これまでの人生が自分自身のものではなかったと次第に自覚しはじめ、父親の臨終を見まもるために生家に戻ってくると、これを契機にしてこのまま離婚しようと決心し、はげしく夫を憎むようにすらなっている。そのためもあって、兄が諫めるのも聞かずに、大胆にも亡父の筆跡をまねて遺言状を書き換え、自分が兄のウルリヒにいましばらく教育される義務があるようにしてしまう。ウルリヒはこれに驚きながらも、無心に情熱的にこの犯罪行為に専念している彼女の姿が、彼の目には「まるで世界が朝日にあまねく浸されているように」映り、これを押し止めることもできず、かえってウィーンの彼の住まいで妹と暮して、ともに愛の「千年王国へ」没入する生活を夢見る。ただし妹をもう一度別の男性と結婚させたいと思っている。ウルリヒは第一巻では数学の研究をしていたが、第二巻では神秘主義の研究を始める。

父の葬儀を済ませ、ウルリヒはまず一人でウィーンに

戻る。生家とはいえ知人もいない地方都市の亡父の家で、喪の期間を妹と静かに過ごすことができ、妹と「千年王国」の話をし、それに関するさまざまな検討もおこなわれたが、大都会のウィーンでは、彼の帰るのを待ち構え、彼を静かにさせておいてくれない人たちがいる。そして彼に秘書をつけて雑用から放免するから秘書役からは下りないようにと懇願する。ラインスドルフ伯爵の現実政治的な配慮が裏目に出て、平行運動は反ドイツ運動とみなされ、第一巻の最後のころには、ドイツ系のオーストリア人の民族主義者らがラインスドルフ邸にデモをしかける事件があったりして、平行運動は窮地に立たされているからである。そんなわけでウルリヒは、気になっていたアガーテの遺言変造事件から今後惹起するかもしれないことを、いろいろ考えたすえ「運を天に任せることにする」。しかしこの事件は、その後一度兄妹のあいだで議論されることはあっても、『特性のない男』のなかで表沙汰になることはないのである。前述した『特性のない男』の前段階では、ウルリヒの前身である主人公のアンダースはこの発覚を恐れて、妹のアガーテとともに遠いイタリアの海岸へと逃避行するのであるが。そしてそこで彼らの求める愛の営みが続け、そして破綻を見るのであるが。どうやら作者のムシルは『特性のない男』では、遺言偽造という犯罪行為を「事件」としては取り

扱わず、一つの「挿話」として取り扱い、これを契機にしてウルリヒに、犯罪とモラルに関する考察の場を提供しているらしいのである。そして遺稿となった校正刷りのなかでは、彼ら二人は世間から離れてウルリヒの小さなお城のような邸にこもり、彼らの愛の「千年王国へ」参入してゆくのである。以上が『特性のない男』のごく表面的なあらすじ、それも二〇数人の登場人物が織りなす関係を度外視して、もっぱら中心人物のウルリヒとアガーテのことにしか触れないというひどいあらすじである。

4 遺稿について

戦後初めて一九五二年にハンプブルクのローボルト出版社から、A・フリゼーの編集により、一九三〇年発表の「第一巻」と三三年の「第二巻」と、遺稿を整理したもの⁵とを合本にして『特性のない男』が世に出たことはすでに述べたところであるが、このフリゼーによる遺稿の編集の仕方に異が唱えられたのである。それをしたのは一九五三年に英訳『特性のない男』(The man without qualities)の第一分冊目を出した訳者のカイザー夫妻である。彼らは、雑誌「メルクル」誌上で、また彼らの著書「ローベルト・ムシル。その作品入門」⁶を通して、フリゼーの遺稿部分の編集にある矛盾を指摘したの

である。こうしてフリゼーの遺稿部分の編集の是非をめぐって激しい論争が巻き起こり、当時私がそれに関心を抱いて追っていたかぎりでの話であるが、それはW・パウジンガーがローマにあるムシルの遺稿をつぶさに調査研究して、フリゼーの遺稿部分の編集の杜撰さと見通しのなさを実証的に批判する論文が一九六四年にローボルトから出されたあとでもなおつづいていた。英訳者のカイザー夫妻は、彼らの『特性のない男』を四分冊にして出すつもりで三分冊目までは刊行したが(一九六〇年)、彼らの編集で遺稿部分が載るはずであった四分冊目は、彼らの逝去のためかついに出なかった。しかし一九六二年に刊行された伊訳の『特性のない男』(L'uomo senza qualità)の遺稿部分は、カイザー夫妻の編集によるものである。仏訳『特性のない男』(L'homme sans qualités)は四分冊で一九五七―五八年に刊行されたが、その遺稿部分はフリゼー編集によるものだった。和訳の『特性のない男』は、一九六四年五月に河出書房新社よりその『世界文学全集』のうちの一卷として、私と二人の友人との共訳で刊行された。そしてこれとは別に、この一卷に手を加えたものを一分冊目として、一九六五―六六年には単行本の四分冊の形で同書房より『特性のない男』が刊行された。その四分冊目が遺稿を取り扱う部分である。われわれはフリゼー編集によらずに、ちょう

ど手に入った上記のW・パウジンガーの論文が勧める新しい編集方法に則りこの部分を翻訳した。そして同論文は、前述した『特性のない男』の前段階に当たるもので、Sの符合でまとめられているかなり大部の遺稿を初めて公表してくれていたので、これを訳して付録にした。われわれの訳書とはほとんど時を同じうして、新潮社より六分冊で『特性のない男』が刊行された。遺稿部分はフリゼーの編集によるものだった。

一九五四年に刊行された“Der Mann ohne Eigenschaften”は、当時の私の月給の半分に当たる五千円程度の値段であったと思うが、私の記憶が正しければ、この初版の売れゆきはそのせいとは思われないが遅々たるものであった。しかし一九七〇年に出されたその「特別版」は発行部数を五万に予定しており、その数の多さには驚かされた。この一六〇〇頁を越えて、しかも字がぎっしりつまっている辞書の厚さの小説が、どこまで読まれていたものか想像もつかないが、ともかく市場価値を得たことだけは確からしい。一九七八年にはフリゼーの編集により、「ローベルト・ムシル全集 全九巻」が刊行され、『特性のない男』はそのはじめの五巻を占めている。三巻までがムシルが生前に発表した部分であり、四巻と五巻が遺稿を扱う部分である。そしてその編集方法は、旧版のものとはまったく異なり、W・パウジンガーが彼の研

究書で勧めている編集方法をほとんど踏襲しているとい
って過言ではないのである。この方法については、「2
『特性のない男』の成立過程について」のなかでW・バウ
ジンガーに触れた箇所ですでに述べたが、ここで少し詳
しく再述することにする。

一九三三年に発表された第二巻第三部は、第一章「忘
れていた妹」に始まり、第三章「一大事件が発生中。
だが、だれもそれには気づかなかったこと」で終ってい
る。これ以後の章はすべて遺稿である。一九三八年に校
正刷りに付されたものは二〇章からなり、第三章「め
ぐり会いのあとで」から第八章「ウルリヒと感情の二
つの世界」までである。これに続いてムシルが晩年にし
た仕事は、W・バウジンガーによれば三つのグループに
分けられる。

(1) 校正刷りに続くものとして一九三八年中に書かれ
た章、第九章「夜の対話」、章番号のない「夜明けの
散歩」、「ヴァルターとクラリセの間の、緑の冠をかざ
しての休戦状態」、第六・章「夏の日の息吹」、第六一
章「夏の日の息吹」、第六二章「兄妹の星座。あるいは
分けられないが、また一つになれないものたち」、第六
三章「怪物を愛する試み」(断章)

(2) 一九三九一四〇年に書かれた三つの章、第八章
「重要なものを目指す志と、それに関する会話の始まり」、

第九章「フォン・シュトゥム將軍が天才について論ず
ること」、第五〇章「問題になっている天才」(断章)

(3) 一九四二年四月一五日、突然死に見舞われるまで
の二年間に書かれて清書されている稿。これは校正刷り
の第四六章から枝分かれして書き継がれたものであり、
第七章「人の中の散歩」、第八章「汝の隣人を汝自
身のごとく愛せよ」、第九章「愛に関する会話」、第
五〇章「探索されない微妙な問題」、第一章「愛する
ことは簡単ではない」、第二章「夏の日の息吹」(断
筆)

以上のように、章番号のない章、また第六・章といっ
た留保つきの番号のついている章などあるにせよ、とも
かくもムシルは、校正刷りに続ける意図で、三通りの方
向をたどって、番号をつけた章を遺しているのである。
したがってこの遺稿の編集では、まずこの章番号がつい
ている三つのグループを正確に分けて取り扱うのが正し
い道と思われる。だがフリゼーの旧版は、それをいわば
無視して、これらのもののうちで重複したり、彼の考え
では邪魔だと思われるものは省略したりしてこれらを並
べ、そしてそれぞれにいわば彼の章番号を勝手につけた
のである。そればかりではない。前述した『特性のない
男』の前段階に当たるものやその他のものを適当にその
後に並べて、それにも延々と彼の章番号をつけて、もし

ムシルが生き続けていたらこうなるのだといわんばかりに、彼の『特性のない男』を作りあげたのである。したがって、そういうことを知らないで『特性のない男』を読む読者は、ムシルがそうした筋で最後まで考えていたのだと思ってしまうに違いない。悪口でいえば、そうならざるをえないのである。好意的にこれを受け入れれば、ムシルが生前に発表した『特性のない男』のなかにも、前段階のものをそのまま取り込んだ文章あるいは章があるし、晩年のもののなかにもそれがある。したがってムシルが生きていたら、前段階のものを利用して話を続ける可能性はないとはいえない。それにいづれ小説なんだから、たとえ継ぎはぎであるとはいえ、適当に並べて読者に面白おかしく読んでもらえるようにすることはいいことだろうし、そうすることで、遺された膨大な遺稿がついでに紹介できるのだから、これはこれでいいのではなからうか、といえるかもしれない。だが新版の『特性のない男』でフリゼーは、むろんW・パウジンガーの説に従ったなどと正直に自白しているわけでないし、むしろいまだに批判しているのであるが、明らかにこれに従っているところを見ると、やはり旧版の編集方法に自己批判を下しているのだといってもいいと思われる。

5 松籟社版『特性のない男』の

遺稿の取り扱いについて

今度は私ひとりで改訳することになった松籟社版のものは、二七、八年前の河出新社版の場合と同じくW・パウジンガーの編集方法に拠っている。だが今回は、新版のフリゼーのそれに拠っているということもできる。両版のちがうところは、河出新社版では、校正刷りにある感情心理学を扱う第五章「アガーテが感情心理学の歴史的要約を見つけて、不満に思うこと」、第五章「感情と感情の形成に関する素朴な記述」、第五章「感情と態度。感情の不安定性」の三つの章は省いたが、今度の版ではこれを入れ、第六・章「夏の日の息吹」を省いたところである。これを省いた理由はあるのであるが、今では省くべきではなかったと反省している。先述したSテキストは、旧版同様に入れている。だがこれで、『特性のない男』のために書かれて遺稿として遺されたものを、すべて訳したわけではない。例えば、一九三三年に発表された第二巻が印刷に回される以前に書かれた第四章「ウルリヒの日記」、第五〇章「ある書き込み」、第五章「書き込みの終わり」の三つの章、一九三四年に書かれたと推定される第四八章「陽は正しきものの上にも正しからざるものの上にも輝く」、第四九章「庭を囲む鉄

格子の特別任務」、第四九章「沈思」の三つの章。この六つの章は下訳として手元にあるが、結局入れなかった。少なくとも第四八章「陽は正しきもの・・・」の章はフリゼー編集の旧版ではなく、パウジンガーが彼の論文で初めて公表したものであっただけに、入れなかったことが今になって悔やまれる。

『特性のない男』は翻訳するだけでも私の手にあまるものなのに、以上のように遺稿の扱いがまた厄介なのである。松籟社版の四巻目まではすでに校了して手元になりが、五巻目は三校の状態で、六巻目は初校の状態で手元にある。いずれも遺稿部分を内容としている。これらが正念場である。

註

(1) バウジンガーによる研究。Wilhelm Bausinger: Studien zu einer historisch-kritischen Ausgabe von Robert Musils Roman "Der Mann ohne Eigenschaften". Rowohlt Verlag GmbH, Reinbeck bei Hamburg, 1964. 因っておけば、バウジンガーは、この論文を刊行したあと、まもなく自動車事故で亡くなった。この方面の研究ではとくに重要な人物だっただけに、その若い逝去が心から惜しまれる。

(2) 第五二章「夏の日の息吹」。52 "Atemzüge einer Sommertags". 「夏の日の息吹」は「遺稿について」のなかで見られるように、章番号も違い内容も少しずつ異なるいくつかのものがあり、この章に対するムシルの思い入れの強さがうかがえる。

(3) 『特性のない男』。Robert Musil: Der Mann ohne Eigenschaften. Hrsg. v. A. Frise. Rowohlt Verlag. Hamburg 1952.

(4) 老子の言葉といわれている。"keinen Scheidungen des Menschentums untertan". この言葉は、マルチン・ブーバーが古今東西の神秘主義者の告白を収録した『恍惚的告白』 Ekstatische Konfessionen "からのもので、ブーバーはこれを老子とその弟子のいった言葉のなかに収録している。

(5) 英訳『特性のない男』。The man without qualities (With a foreword and transl. by Ernst Kaiser, Eithne Wilkins). London: Secker & Warburg. 巻1: 1953. 巻11: 1954. 巻11: 1960. 現在ではこの三分冊は PICADOR 叢書に入れられている。

(9) 『ローベルト・ムシル。その作品入門』。Ernst Kaiser/Eithne Wilkins: ROBERT MUSIL. Eine Einführung in das Werk, W.

Kohlhammer Verlag GmbH., Stuttgart
1962.

(7) 伊訳『特性のない男』。L'uomo senza qualità (Anita Rho). Torino: Einaudi. 卷1: 1957. 卷2: 1958. 卷3: A cura di Ernst Kaiser ed Eime Wilkins. Introd. di Cesare Cases. 1963.

(8) 仏訳『特性のない男』。L'homme sans qualités (Philippe Jaccottet). Paris: Ed. du Seuil. 卷1-卷6: 1957-1958. 現在でも同社から二巻本で刊行されている。なお、英、仏、伊訳の『特性のない男』が刊行された当時、スウェーデンの語訳(1961-1963)、スロベニア語訳(1961-1963)、クロアチア語訳(1967)がそれぞれあいで刊行された。

(9) 「ローベルト・ムシル全集 全九巻」。

Robert Musil, Gesammelte Werke in neun Bänden, herausgegeben von Adolf Frisé. Veröffentlicht im Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH., Reinbeck bei Hamburg, Mai 1978.

一九九二年一月九日